アメリカン ビュー

AMERICAN VIEW

Special Edition

アメリカ大使館公式マガジン

特集

日本で育んだ友情

ケネディ大使の3年間の足跡

灯籠流し

広島からの平和のメッセージ

「鳴き砂」が結ぶ日米ふたつの町

障害者を受け入れる多様性のある職場づくり

U.S. Embassy Japan

日本で育んだ友情
ケネディ大使の3年間

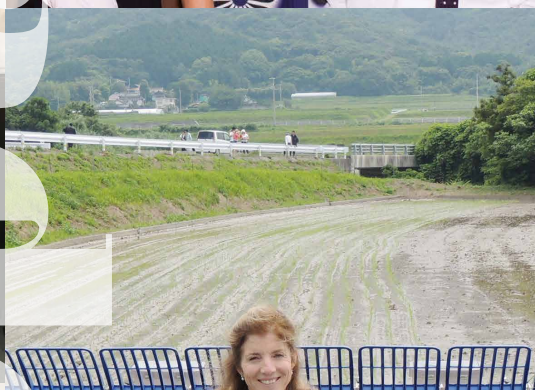
November 2013 – January 2017

キャロライン・ケネディ駐日米国大使は2013年11月、初の女性駐日米国大使として日本に到着しました。以来3年余りにわたり、日米友好の架け橋としての役割を果たしてきました。大使は東日本大震災の被災地・東北への思いが強く、在任期間を通じて何度も訪れ支援を続けました。また広島、長崎、沖縄など日本各地を訪問し、より平和な世界を実現するため人々と交流しました。こうした日米の絆の強化に向けた大使の努力が結実したのが、2016年5月のオバマ大統領の歴史的な広島訪問です。

実はケネディ大使と日本との縁は深く、少女時代までさかのぼります。幼いキャロラインが暮らすホワイトハウスに日本からひな人形が贈られてきたのは、1962年のことでした。また大使の父・ケネディ大統領は、江戸時代中期の米沢藩主・上杉鷹山を尊敬していました。このように幼少期から日本の文化に触れてきたケネディ大使は、駐日大使としての在任期間中もさまざまな機会を捉えて日本文化について学びました。

ケネディ大使はまた、多様な人々が活躍できる社会の実現にも取り組みました。女性の活躍促進、LGBT（性的少数者）の人々や障害者の権利保護などをテーマとする多数のイベントに参加し、全ての人に機会を与えることの大切さを訴えました。

さまざまな分野で日米関係の発展に貢献したケネディ大使の日本での3年間の活動をご紹介します。



ケネディ大使の3年間の足跡

キャロライン・ケネディ大使は2013年11月、
初の女性駐日米国大使として日本に到着しました。
任期中、オバマ大統領やバイデン副大統領をはじめ
多くの米国政府高官が日本を訪れました。

2013年11月の到着時に成田空港でメディアを前に声明を発表（写真左）。信任状奉呈式へ向かう馬車から降りる大使（写真右上）。着任から数日後、安倍首相と初会談（写真右下）。

“父の残した
公務に尽くすという
使命を引き継ぐことも
誇りに思います”

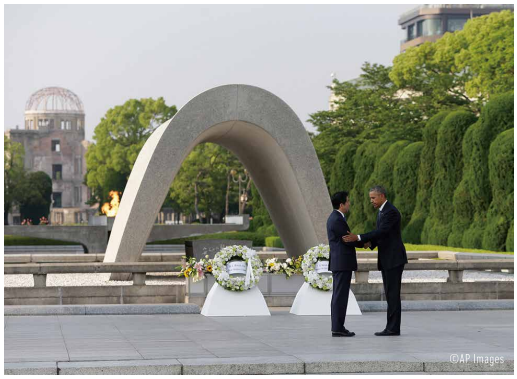
大使着任後、初めて来日した政府高官は バイデン副大統領でした。2013年12月に来日し、女性の登用推進を訴えました。

2014年4月には、オバマ大統領を日本に迎えました。大統領は天皇、皇后両陛下主催の歓迎式典に出席し、日本科学未来館で講演しました。

女子教育の支援活動
“Let Girls Learn”イニシアチブ推進のため、
2015年3月に初来日したミシェル・オバマ大統領夫人。
東京ではケネディ大使、安倍昭恵夫人と共に
関連イベントに出席し、京都では日本文化を体験しました。

2015 Visits

”いつの日か、証人としての
被爆者の声を聞くことが
かなわなくなる日が来ます。
けれども1945年8月6日の朝の記憶が
薄れることがあってはなりません“
――オバマ大統領 広島平和記念公園にて



2016年5月、現職米国大統領として初めて広島を訪れたオバマ大統領。
安倍首相と共に平和記念公園での式典に出席しました（写真右下）。
その1カ月前にケリー国務長官が広島を訪問し、
大統領の広島訪問を後押ししました（写真左下）。
オバマ大統領の広島訪問にはケネディ大使（中央）と
夫のシュロスバーグ氏（左）も同行しました（写真上）。

2016

Diversity

2015

2015年8月、東京で開催された
「女性が輝く社会に向けた国際シンポジウム」(WAW! 2015)で、
男女共同参画と女性のさらなる活躍を促すあいさつをしました。

駐

**日米国大使として、多様な社会の実現、
LGBT(性的少数者)の人々の権利保護、
女性の活躍推進、留学促進など、
オバマ政権の重要課題に取り組みました。**

2016

2016年5月、
東京・代々木公園で行われた
LGBTの人々の権利を訴えるイベント
「東京レインボープライド」に参加し、
スピーチをしました。

“女性が直面する問題を、今すべて解決することはできませんが、女性が集まって互いに刺激し合い、協力し、能力を活用し合うたびに、変化を起こす機会がもたらされます”
— ケネディ大使

2016年10月には、
リオデジャネイロ・パラリンピック
女子マラソン(視覚障害)銀メダリストの
道下美里選手らと伴走し、
全ての人に機会を与えることの
大切さを訴えました。

Reconciliation

広島、長崎、沖縄など各地を訪問し、より平和な世界を実現するため、人々と触れ合い、日米の架け橋の役割を務めました。

沖縄戦没者墓苑では犠牲者を悼み献花しました

広島平和記念資料館で原爆による被害についての説明に聞き入るケネディ大使

着任直後に訪れた長崎では日米友好の象徴・ハナミズキの植樹式に参加しました

Education

詩を介して国際文化交流をする「ポエトリースラム」。
オンラインでニューヨーク、東京、沖縄、ソウルをつなぎ、
各国の子どもたちが詩作の能力を競い合いました。
また留学推進政策の一環としてさまざまな学校を訪問し、
国際的な人材育成の重要性を訴えました。

Tohoku 2013

駐 日米国大使として最初に足を運んだのは、
東日本大震災の被災地・東北でした。着任から6日後のことです。
東北地方に強い思い入れのある大使は、
その後、東北全県を訪れました。

2013年11月に夫のシュロスバーグ氏と最初に訪れたのは宮城県でした。
学校訪問では絵本の読み聞かせや習字体験をし、
南三陸町の仮設住宅ではエコたわしを作る女性グループと懇談しました。
この年、大使公邸のクリスマスツリーには、
この手作りのエコたわしが飾られていました。

2014

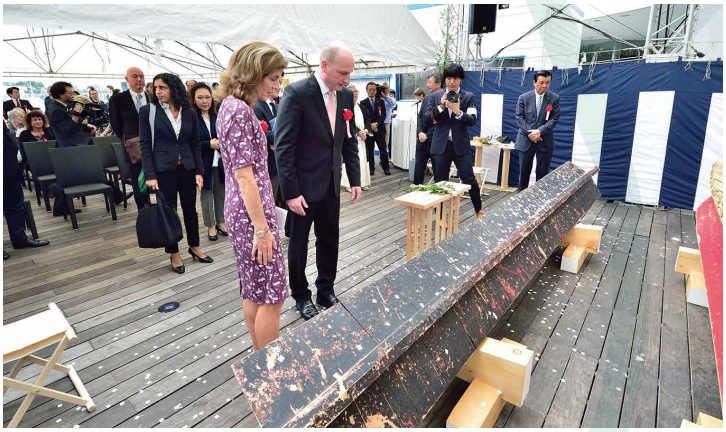
2014年5月には長男のジャックさんと共に
福島県いわき市の被災児復興支援施設
「チャイルドハウスふくまる」を訪れたほか、
福島県沖に設置された
沖浮体式洋上ウィンドファームも視察しました。
（写真いずれもAP Photo/Toru Yamanaka）

青森県訪問では米軍三沢基地の視察、
ねぶた祭りの太鼓を見学しました。
秋田県では秋田国際大学を訪れました。

復興を支援し、震災の記憶を未来に残すために
2013年にスタートしたTour De Tohoku。
ケネディ大使が過去3年、毎年参加したこのイベントは、
大使にとって東北での大切な思い出のひとつになりました。
（写真 河北新報）

“東北を訪れるたびに、生活再建や地域再生に取り組む皆さん、
ボランティアとして復興に貢献する方たちのお話を伺い、
彼らの立ち上がる力と強い精神力に心を動かされます”
── ケネディ大使　河北新報インタビュー（2016年9月）

2013年3月22日、東日本大震災時の津波に運ばれ、
青森県八戸市から
オレゴンの海岸に漂着した笠木（写真左上）。
オレゴン州の協力で返還された
笠木の返還式典に出席したケネディ大使（写真右上）。
青森県八戸市の厳島神社の鳥居は
震災から約5年ぶりに再建されました（写真下）。



Culture

俳

句や盆栽、着物など、日本文化を敬愛するケネディ大使。
ソーシャルメディアで、スタッフも驚く日本関連の秘話を紹介しました。
またハロウィーン動画を作るなど、お茶目な一面を見せることもありました。

1962年、北海道に住む松本艶子さんから
ホワイトハウスにひな人形が送られてきました。
この人形を大切にしていた大使は、
52年ぶりにひな人形を里帰りさせて大使公邸に飾り、
松本さんにお礼のメッセージを送りました。

2014

“1つの贈り物が人の心に触れ、
人生を変えるきっかけにもなりえます”
―ケネディ大使

太平洋戦争中、海軍中尉として
旧日本海軍と戦ったケネディ大統領は、
ソロモン諸島近海を航行中、駆逐艦「天霧」に衝突され、
島に漂着し救助されました。
しかし戦後、天霧の艦長だった花見氏へ
「昨日の敵は今日の共」と手紙を送り親交を結びました（写真右）。
2015年3月、「ＪＦＫ－その生涯と遺産」展の開会式で、
ケネディ大使は故・花見氏の
妻の和子さんとの対面を果たしました（写真左）。

2015

大使は、母ジャクリーンさんが、
孫娘のローズさんにプレゼントした
日本の絵本「こんとあき」を
大好きな絵本として紹介。
本作に登場し、
大使の憧れの風景だった
鳥取砂丘を、2015年10月に
家族で訪れました。

2014

2014年の大使館新年会で着物を着た大使。表紙の写真でも着ている着物のリメイクドレスもお気に入りのようです。

2015年6月14日に
安倍昭恵夫人と
田植え体験をする
ケネディ大使。
もんぺがなかなか
似合っていますね。

2015

2016

“No Carp, No Life!”

日米両国で人気のスポーツ・野球では、さまざまな球団の始球式に参加。中でも広島東洋カープがお気に入りだったようで“No Carp, No Life!”とツイートするなど、カープ女子の一面をのぞかせていました。

2015

盆栽が大好きな大使は2015年5月、都立園芸高校の盆栽部を招き、盆栽ワークショップを開催。初めての盆栽作りに大喜び。

スーパーマリオ → アベマリオ → 大使
の3変化動画で
ハロウィーンを盛り上げました。

A BROADER VIEW

人生を変えるアメリカ留学

「A Broader View ― 人生を変えるアメリカ留学 ―」は、アメリカに留学したことがある日本人の皆さんに、その経験を語っていただくビデオプロジェクトです。このプロジェクトを発案したキャロライン・ケネディ駐日米国大使と、留学経験者としてプロジェクトに参加したタレントの関根麻里さんが、2016年10月12日に大使公邸で対談しました。その内容を一部ご紹介します。

関根麻里：「A Broader View ―人生を変えるアメリカ留学―」プロジェクトの立ち上げ、おめでとうございます。このプロジェクトを始めたのは大使のお考えと伺いました。

ケネディ大使：日本でお会いした多くの方々から「アメリカに留学して人生が変わった。帰国して夢を追求することができた。起業することができた。芸術家や科学者になることができた。留学していなければ、行動に移す勇気や想像力を持つことはできなかった」というお話を伺いました。それを聞いて、彼らの体験談を若者に聞いてほしいと思ったのです。

関根麻里：私もアメリカに留学した一人です。ボストンのエマーソン大学に留学しました。

自分自身を知る

関根麻里：自分が育ったものとは異なる文化に浸って生活すると、新しい世界が広がります。とても感動的な経験になりえます。

ケネディ大使：私も海外に留学しましたが、自分自身を知ることができることに気がつきました。自分が何に関心を持っているか、これまでに経験したことのない状況に置かれたとき、自分がどう対応するかが分かりました。

留学すると、日常生活の中で自分に自信が持てるようになり、

本当の意味での冒険を体験できます。ですから大変良い経験だと思うのです。この経験は、帰国してから大きな意味を持つようになります。

異文化コミュニケーションの秘訣

関根麻里：異なる文化背景を持つ人たちとのコミュニケーションでは、何を心がけていますか。

ケネディ大使：観察することと、話をよく聞くことです。そして、ある出来事への対処の仕方として、たとえ自分のやり方が一番と思っていたとしても、他の人のやり方に興味を持つことです。日本には、ミーティングの設定の仕方や道の歩き方など、日常のささいなことで、米国とやり方が異なる点がたくさんあります。正解はありませんが、異なる2つのやり方があり、私が思い付かなかった斬新で異なった方法を取り入れている様子を、毎日楽しんで見つけています。

関根麻里：私は米国に住んだことで、実に多くの相違点があること、そして全てを受け入れる必要はないけど、全てを拒んではいけない、ということに気がつきました。

ケネディ大使：その通りです。

ケネディ大使にとっての「A Broader View」プロジェクトの意義

関根麻里：大使にとって、このプロジェクトにはどのような意義がありますか?

ケネディ大使：このプロジェクトの目的は、新しい一歩を踏み出そうとする人たちの不安を取り除き、留学に関する情報を提供することです。

留学する学生の多くは、留学から戻ってきた後、就職先が簡単に見つかるのか、孤立し、不利になるのでは、という心配を抱えています。しかし、ビデオで留学体験者が口を揃えて言っているのは、全く逆です。留学は、自分自身そして未来の自分への大きな投資です。将来的には、収入が増え、自分が追求する道で成功を収めることができます。

留学によって多くの機会を得て、人とのつながり、特に国際的なつながりに恵まれることになります。今日、私たちの住む世界はグローバル化し、企業もグローバル化しています。海外進出する日本企業も増えています。留学で得たスキルや異なる国の人とつきあう術は、最大の武器となります。

私は大使として、日米両国についての思いがあります。日本に着任して以来、最も感銘を受けたのは日米関係の深さです。しかし最近、特に米国では、この2カ国間関係の重要性を理解していない風潮が見られます。日米は最も緊密な友好国ですが、この関係の礎を築いたのは、数世代にわたって交流し、互いに学び合い、互いの国で生活し、ビジネスや科学分野での連携してきた両国民です。だからこそ、私たちは次世代のために、私たちの両親や祖父母の努力から生まれた、現在私たちが幸運にも享受している恩恵や恵みを守り続けたいと考えるのです。だから両国の学生には、互いの国で勉強してほしいと思います。日米の協力が必要な問題はたくさんあります。留学で芽生えた友情や友人たちとつながりを保っていれば、いつか一緒に働いて、より大きな成果を生み出すような日が来るかもしれません。

2016年5月27日、広島平和記念公園で森重昭さんを抱き締めるオバマ大統領（AP Photo/Carolyn Kaster）

「灯籠流し」

広島からの平和のメッセージ

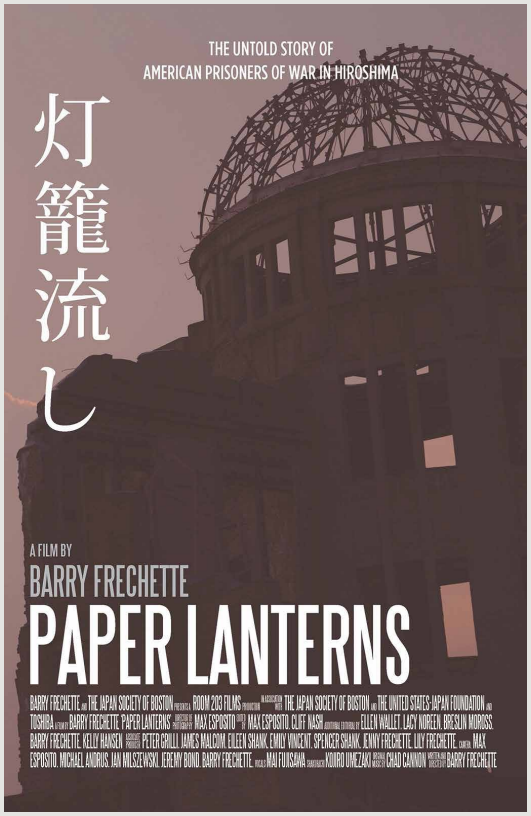
宇田川サーシャ
在日米国大使館
英語編集者

2016年5月27日、バラク・オバマ大統領が広島を訪れた。この歴史的な訪問の際に世界中に配信された写真の中で最も感動的な1枚は、オバマ大統領が被爆者の一人、森重昭さんを抱き締めているものだった。第2次世界大戦中、広島で被爆した日本人をアメリカ大統領が抱き締める―この写真を見た多くの人が、その意義深さに言及した。そしてこの光景は、かつての敵同士の和解と核兵器のない世界に向けた一歩を象徴する感動的なシーンとしてたたえられた。

バリー・フレシェット監督

この場面を見た世界中の多くの人々の中には、広島平和記念公園で大統領が演説した後、言葉を交わす被爆者代表になぜこの男性が選ばれたのか不思議に思う人もいたかもしれない。さらに、大統領は演説で森さんについて触れていた。「この地で命を落とした米国人の遺族を探し出した男性がいます。彼らが失ったものは自分が失ったものと同じだと信じたからです」。これがその一節だ。

各国メディアがすぐにこれを取り上げ、森さんが広島の原爆で犠牲になった12人の米兵捕虜の特定と慰霊に人生をかけて取り組んできたことを報道したため、森さんの功績は誰もが知るところとなった。しかし、オバマ大統領の広島訪問の前に、森さんの活動を知っていた人物がいた。アメリカ人映画監督バリー・フレシェット氏だ。彼はドキュメンタリー映画「灯籠流し」（原題：Paper Lanterns）で、14万人以上が亡くなった広島の原爆投下で九死に一生を得た森さんが、広島で犠牲になった12人の米兵捕虜の足跡をたどった戦後40年以上にわたる取り組みを描いた。



映画「灯籠流し」のポスター

広島で亡くなった12人のアメリカ人パイロットたちは、1945年夏、呉港沖で戦艦「榛名」を爆撃した際に日本軍に撃墜された米軍の爆撃機に搭乗していた。彼らは捕らわれ、爆心地に近い中国憲兵隊司令部に送られた。彼らの最期について知らされた遺族はほとんどいなかった。森さんは長い歳月をかけて犠牲になった米兵捕虜の遺族を探し出し、愛する人の最期の様子を知らせた。さらに国立広島原爆死没者追悼平和祈念館に彼らの写真を納めるために尽力しただけでなく、捕虜収容施設の跡地に個人的に慰霊銘板を設けることまでした。

映画「灯籠流し」は、アメリカ人パイロットの足跡と、彼らの身元を特定した森さんの努力を描いただけでなく、森さんから捕虜たちの最期の様子を聞き、気持ちの整理をつけた遺族たちについても伝えている。遺族の中には、来日にして森さんと共に広島平和記念式典に参列し、米軍の爆撃

広島で亡くなった米兵捕虜関連の資料に目を通す森さん

機が撃墜された場所を訪れた人もいる。

フレシェット監督の大おじは、広島で亡くなった捕虜の一人、ノーマンド・ブリセット三等空兵と子どものころからの友人だった。ブリセット空兵の遺族から、彼の消息を伝えたいという日本からの手紙を受け取ったという話を聞いたフレシェット監督は、興味を持った。アメリカン・ビューとの書面インタビューで、彼は次のように答えている。「ノーマンド・ブリセットだけでなく、森さんのことも知り、この話を誰かが伝えなければいけないと思いました。手遅れにならないうちに誰かが伝えなければ、この話は歴史に埋もれてしまう。広島で何があったか、人々は知る必要があると私は感じました」

広島に原爆が投下されたとき、森さんは8歳だった。学校へ向かう途中に爆風に襲われ、橋の上から吹き飛ばされた。気がつくと、きのこ雲の下、あたりは真っ暗闇だった。森さんは何とか生き延び、大学卒業後、証券会社に就職したが、一方で歴史の研究に情熱を注いだ。映画の中で彼はこう言っている。「闇の中で明かりを求めて必死で突進するというようなことを、いつもやっておりました」

森さんは書面インタビューで次のように語っている。「米兵はひっそりと死んでいました。遺族に知られることもなく、慰霊碑もありません。私は思いました。原爆で生き残った人間として、彼らが犠牲になったことを知らせよう。せめて、遺族には知らせようと決心しました」。森さんは被爆の直前に、捕虜たちが収容されていた司令部の近くにあった学校から、別の学校に転校した。だから生き残ることができたが、転校していなければおそらく原爆の犠牲となっていただろう。

フレシェット監督はこのように述べている。「森さんは捕虜たちの気持ちがわかったのだと思います。彼らは故郷から遠く離れた地球の裏側で孤独を感じ、おびえていました。彼らは原爆の犠牲になった多くの人々と運命を共にしたのです。しかし森さんの行動は予想外でした。彼の取った行動から、彼の素晴らしさがわかります。森さんは調査してその結果だけで満足することもできました。しかし彼は、アメリカ

（右から）森さん、フレシェット監督、森さんの妻の佳代子さん

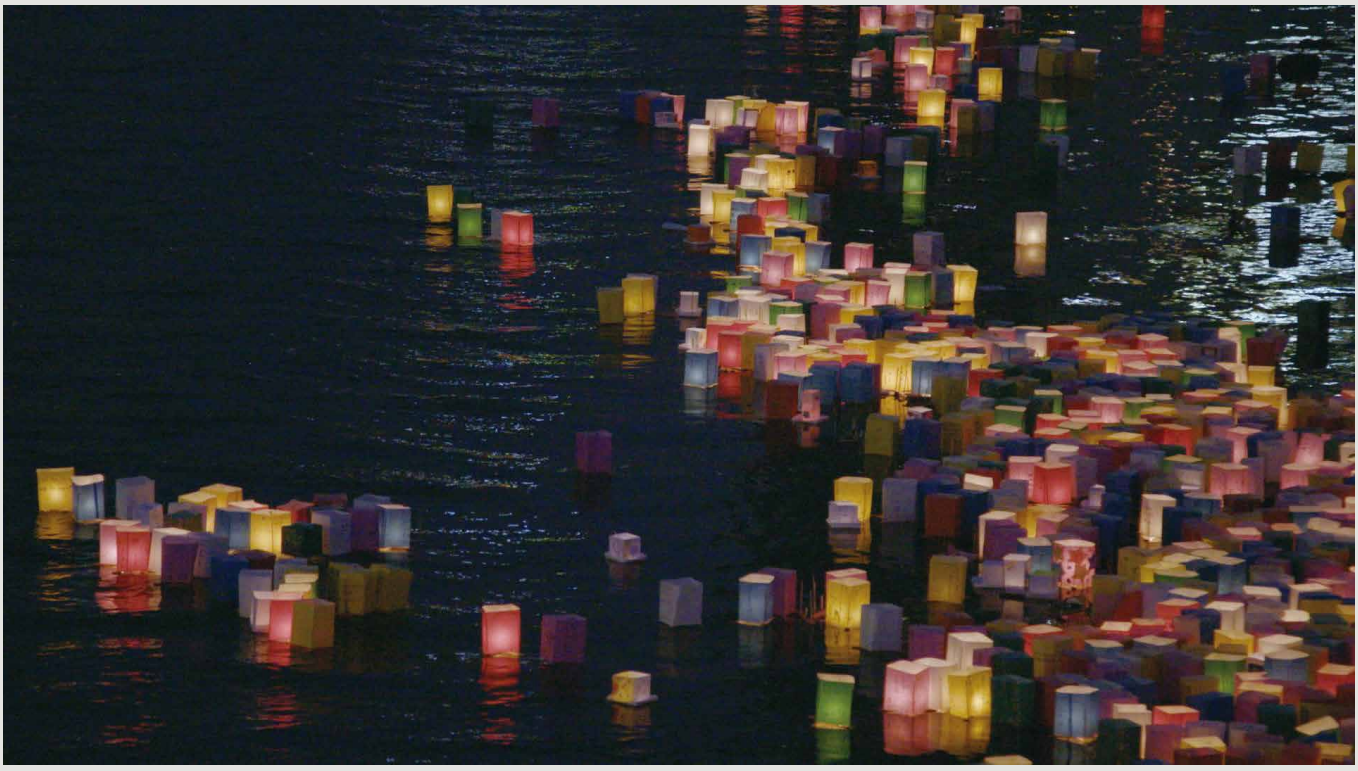
にいる遺族に連絡を取り、仕事の傍ら捕虜たちの慰霊碑まで作りました。森さんは国籍にかかわらず、全ての犠牲者を追悼しました。だからこそ、彼は特別なのです。和解を取り持つ役割を果したのです」

フレシェット監督が突然、広島の自宅を訪問したとき、森さんは驚いたそうだ。「資料の提供だけだと思っていました」と森さんは言う。「灯籠流しの話をしたのは家内だと思います。まさかそれが映画の題名になろうとは思いませんでした」。このドキュメンタリー映画のタイトルは、毎年８月６日の夜に広島で開催される「ピースメッセージとうろう流し」にちなんで付けられた。誰でも自由に灯籠に平和のメッセージを書くことができる。灯籠は元安川に流され、原爆ドームの前を流れていく。映画では、広島で犠牲になった捕虜の一人、ラルフ・ニール陸軍二等軍曹のおいと共に森さんが灯籠流しに参加する、非常に感動的な場面が描かれる。

フレシェット監督は言う。「平和への道は小さな一歩から始まります。この映画はそれを証明しています。そしてこれこそ森さんが大勢の人のためにしたことです」。オバマ大統領が広島で演説し、森さんを抱き締める様子をテレビで見たフレシェット監督と家族は、涙を流したそうだ。「信じられない光景でした。森さんご夫妻にとって、あの式典に参加し、功績を認められたことがどういう意味を持つか、私たちにはわかりました。森さんが感情をあらわにし、オバマ大統領に体を寄せ、二人が抱き合うのを見ることができました。とても特別な瞬間でした。あの光景は、私たち皆にとって特別です」

オバマ大統領と会ったときのことについて、森さんはこのように語っている。「5月27日、私と大統領は心と心が通じ合いました。米兵捕虜は、自分たちが犠牲になったおかげで平和になった、自分たちは単なる犠牲者ではない、英雄なのだと認識していると思います。やっと認められた。71年たって。大統領の私へのハグは広島、長崎で犠牲になった人たち全員をハグして、平和の尊さを教えてくださったものだと理解しています」

８月６日夜、広島の元安川に流される灯籠



2015年、中山泰・京丹後市長（当時）から鳴き砂の説明を受けるケネディ大使

京丹後とマンチェスター・バイ・ザ・シー

「鳴き砂」が結ぶ日米ふたつの町

2015年6月、キャロライン・ケネディ駐日アメリカ大使は、京都府京丹後市を訪問した。京丹後市は、琴引浜の「鳴き砂」で有名な日本海に面した都市だ。鳴き砂は歩くと「クックッ」という音を立てる砂で、主成分は石英。きれいな水や空気で砂が磨かれて、汚れのない状態にあるときに力が加わると「鳴く」そうだ。

鳴き砂はアメリカにもあり、ケネディ大使も子どものころ、鳴き砂の浜辺を訪れたことがあった。京丹後市を訪れて故郷の鳴き砂を思い出した大使は、「マサチューセッツ州にも鳴き砂がありますから、その地域と交流してはいかがですか」と提案した。

これをきっかけに、2015年12月、マサチューセッツ州マンチェスター・バイ・ザ・シーのマンチェスター・メモリアル小学校から、同校の児童が描いた絵、文房具、子どもたちの写真などの贈り物が、京丹後市立島津小学校に届いた。この思いがけない贈り物に島津小学校の児童たちは大喜びした。同校の吉岡龍哉校長によると、児童たちは贈られた絵やアメリカの子どもたちの写真に興味を示し、遠い国を身近に感じていたそうだ。絵や写真など目で見てわかる物を贈ってもらったので、子どもたちはたとえ英語がわからなくても、感覚的

左上／マンチェスター・バイ・ザ・シーのシンギング・ビーチを訪れた京丹後市の一行とボストン日本協会のシニアアドバイザーのピーター・グリーリ氏（写真中央） **左下／**ビーチでボストン日本協会のグリーリ氏（写真中央）と話す京丹後市の木村嘉充氏（同右）と宗原めぐみ氏（同左） **右上／**シンギング・ビーチ・クラブの昼食会に出席した皆さん

に楽しむことができた。お返しに島津小学校からメモリアル小学校に、メッセージや琴引浜の貝を使った万華鏡などが贈られた。

ここから京丹後市とマンチェスターの交流が始まった。京丹後市は条例で国際交流の推進をうたっており、国際的な視野を持つ人材の育成を目指している。マンチェスターとの交流はこの目的にかなう。交流する都市の行政や教育制度について理解を深めるため、2016年7月に京丹後市の視察団がマンチェスターを訪れた。同市の教育・総務部門の職員ら一行は、現地で教育・行政関係者、砂浜の環境保全に取り組む人々、歴史博物館の職員ら多方面の人々に面会した。

視察の参加者たちは、マンチェスターの人々の熱烈な歓迎と京丹後市との交流への高い関心に感激した。メモリアル小学校の玄関には「ようこそ」の文字があり、島津小学校からの贈り物が“Our Sister School”という言葉と共に展示されていた。同校が島津小学校との交流を大切にしていることの表れだった。鳴き砂があるシンギング・ビーチは、琴引浜の砂の色によく似ており、周辺の岩石も酷似していた。参加者は、実際にマンチェスターの人々と会い、施設を視察することによって、人々の人柄や文化的な雰囲気に直接触れることができ、今後交流を進めていく上でプラスになるという印象を持った。

今後の交流について京丹後市の担当者は、まずスカイプなどの技術を活用して小学生同士の交流を深め、姉妹校提携を通じて交流を継続・拡大したいと考えている。そして次の段階として、マンチェスターと京丹後という自治体同士が、鳴き砂という共有する自然現象と環境保全の視点から交流を深め、将来的には姉妹都市提携も検討していきたいとしている。島津小学校の吉岡校長も、メモリアル小学校とは姉妹校として息の長い交流をし、異文化の人々と積極的にコミュニケーションを取ることができる子どもたちを育成したいと考えている。

ケネディ大使はこう述べている。「（子どものころ歩いたシンギング・ビーチと同じ音がする琴引浜を歩いたとき）私たちには相違点よりも多くの共通点があることを思い出しました。海は両岸に住む人々を隔てるのではなく、つないでいるのです」。鳴き砂が結んだ2つの町の交流が今後も発展していくことを願う。

SENATOR

TOM HARKIN

2016年7月フィラデルフィアで開催された民主党全国党大会で手話を交えてスピーチするハーキン元上院議員 (AP Photo/J. Scott Applewhite)

障害者を受け入れる多様性のある職場づくり

「ADAにより、学校、職場、映画館、裁判所、バス、野球場、国立公園などアメリカ社会を構成するさまざまな場所が、まさしく全ての人たちのものとなった」

オバマ大統領は昨年、「障害のあるアメリカ人法」（ADA）成立25周年の記念式典でこのように述べ、「障害のある多くのアメリカ人が、それぞれの能力を磨き、世界に対し独自の貢献をする機会を得ることができるようになった」と続けた。

ADAが1990年に制定される前まで、雇用主には障害者の採用が義務付けられていなかった。ADAは、身体障害者および知的障害者への差別の撲滅を目的とし、障害者たちが社会に参画し、経済面も含めて自立して生活する平等な機会を得られるようにした。職場での差別を禁止するADAのおかげで、全米各地で障害者雇用が進み、あらゆる職種で、障害者が自らの可能性を発揮できるようになった。

トム・ハーキン元上院議員は、ADAを起草した主要議員の一人だ。テッド・ケネディ上院議員（故人）と共に、この重要な法律の成立に尽力した。今年の民主党全国党大会では、参加者たちに「アメリカ」を表す手話を教え、脚光を浴びた。彼は「実に美しい手話だ。皆が輪になってつながっていることを示し、我々は皆共にあり、この無限に続く社会という輪の中で誰も置き去りにしないことを意味している。これこそアメリカだ」と述べた。

9月26日、駐日米国大使公邸で、ハーキン元上院議員（写真左）と共に、障害のある方々を迎えるケネディ大使（同中央）

9月26日にアメリカンセンターJapanで開催されたプログラム「障害のあるアメリカ人法（ADA）26周年：その功績とこれからの課題」で講演するハーキン元上院議員

2016年9月、ハーキン氏は在日米国大使館の招きで来日し、障害者差別をなくす取り組みについて講演した。日本では、国会議員にADA成立の経緯について話し、キャロライン・ケネディ駐日米国大使主催のレセプションで障害のある方々と交流を持った。アメリカンセンターJapanで開催された大使館主催の講演会には、非政府組織（NGO）や非営利組織（NPO）の職員、弁護士、政府関係者、報道関係者、学者、大学生などが参加した。

講演でハーキン氏が口にしたのは、障害者の権利擁護に取り組むきっかけとなった兄フランクの存在だ。フランクは聴覚障害者で、彼が教育を受けた特別支援学校では、将来就ける職業は、パン職人か靴職人、印刷業者の助手だけだと教えられていた。しかし、彼はいずれの職業にも興味がなかった。最初はパン職人になったが、ジェットエンジンを製造する会社の経営者と出会い、その会社で働くことになった。フランクの真面目で実直な働きぶりを見たこの経営者は、他の聴覚障害者も採用するようになった。

ハーキン氏は、次のように語った。

「この事実から思ったのは、世の中にいる聴覚障害者の中で、いろいろなことができるにもかかわらず、若い時に『他には何もできない』と決めつけられた人が一体どれくらいいるのだ

ろう、ということだ」

ハーキン氏は、兄フランクをはじめ、身体障害や知的障害のある人たちと接することで、ADAは全ての障害者を対象とした包括的な法案にしなければならないことに気がついた。「我々は、1964年に公民権法を成立させた。この法律は、人種、肌の色、信条、信仰、性別、出身国による差別を禁じている。しかし、障害のある人たちはこう言った。『私たちは取り残された』。1990年まで、障害者たちを公然と差別することは許されていた。レストランに視覚障害者の人が来たら、店側は入店を拒否することができた。どうすることもできなかった。仕事の面接に車椅子に乗った人が来たら、たとえその人が採用条件を満たしていても、雇用主は『体の不自由な人は必要ない』と門前払いすることもできた。このような行為は違法ではなかった。これを違法と定めたのがADAだ。障害に基づく差別を禁止した」とハーキン氏は語った。

ハーキン元上院議員とケネディ大使

ハーキン氏は、ADA制定後に彼が見てきた変化についても語った。彼が特に感動したのは、あるドラッグストアの物流センターの話だ。ここでは働く人の4割が障害者であり、身体障害や知的障害がある従業員たちが、他の従業員と一緒に働き、給与、福利厚生や退職金などでも同等の待遇を受けている。ハーキン氏はその企業の役員から、同社の施設の中で、この物流センターが全米随一の生産性を誇っていること、そして同社が障害者の採用、研修を通じて「障害のある従業員は、間違いが少なく、真面目に勤務する」ことを学んだという話を聞いた。

9月27日、国会議員会館で障害者の権利について話すハーキン元上院議員

ハーキン氏の地元アイオワ州の小さな町では、ADAのおかげで、知的障害のある若い女性がカフェをオープンするという夢を実現することができた。彼女は「バリスタ養成講座」を受講し、企業助成金を受けて事業を起こし、他の障害者を雇用した。「知的障害者が自分の店を経営する、こんなこと、誰が想像できたであろう」と、ハーキン氏は感動の声を上げた。

ADAの制定により、障害者差別の解消で前進が見られた。しかし、ハーキン氏はまだ道半ばと指摘する。「最も困難な障壁は、いわゆる物理的な障壁ではなく、人々の考え方による障壁だ」と言う。職場への移行をスムーズにするため、障害のある子どもたちに、特別支援学校ではなく、普通学校で教育を受けさせ、公共施設や公益事業の設計の初期段階から障害者が関わることの必要性を訴えた。

在日米国大使館 広報・文化交流部
アメリカンビュー編集部よりお知らせ

インターン募集

広報・文化交流部では、写真撮影や記事の執筆など広報活動のお手伝いをしてくれる学生インターンを募集します。応募締め切りなど詳細についてはこちらをご覧ください。

http://amview.japan.usembassy.gov/about-amview

ストーリー募集

アメリカや日米関係にまつわる皆さんのストーリーを記事にしませんか。アメリカ留学旅行中の新たな発見、日米間の架け橋として活躍している人の紹介など、皆さんがシェアしたいお話をメールで編集部（TokyoAmView@state.gov）までお寄せください。英語でも日本語でも受け付けています。

アメリカン・ビューは在日米国大使館 広報・文化交流部が発行するマガジンです。アメリカの文化や社会を日本の皆さんに紹介し、日米関係にまつわる問題や出来事を考察しています。本誌の送付を希望される学校や団体は、使用目的を明記のうえ下記のメールアドレスまでご連絡ください。ご意見・ご要望もお待ちしています。下記のアドレスにお送りいただくか、ウェブ版のコメント欄から送信してください。

連絡先

在日米国大使館 広報・文化交流部報道室 アメリカン・ビュー編集部
〒107-8420 東京都港区赤坂 1-10-5
E-mail　TokyoAmView@state.gov
WEB　http://amview.japan.usembassy.gov

＊本誌記載の記事に述べられている意見は、必ずしも米国政府の見解を表すものではありません。

編集・発行／在日米国大使館 広報・文化交流部 〒107-8420 東京都港区赤坂1-10-5
2017年1月発行 American View: amview.japan.usembassy.gov 在日米国大使館：jp.usembassy.gov/ja American Center Japan イベント・留学情報：AmericanCenterJapan.com
ウェブサイト版では、記事の全文、イベントなどのビデオや写真、その他の情報もご覧いただけます。本誌記載の記事に述べられている意見は、必ずしも米国政府の見解を表すものではありません。

新たな生活に向け一歩を踏み出すオバマ大統領一家

オバマ大統領とその家族は、間もなく、8年間過ごしたホワイトハウスに別れを告げ、新たな生活を始める。過去のほとんどの大統領は、任期を終えるとワシントンを離れたが、オバマ一家は下の娘のサーシャが中等学校を卒業するまでの数年間、ワシントンに残る予定だ。

オバマ大統領は以前、次期大統領が就任する2017年1月20日が過ぎたら「職探し」をするとジョークを飛ばしたが、おそらくはまず、回想録を執筆することになるだろう。そしてバラク・オバマ財団と協力して慈善活動に携わるとみられる。昨年、大統領はこう語っている。「以前のような、人を助ける仕事に戻るつもりだ。若者の教育と雇用の確保を支援する」。ミシェル・オバマ大統領夫人もホワイトハウスでの日々について本を執筆すると思われる。同時に、社会奉仕活動を継続し、特に大統領夫人として始めた、世界各地の少女の就学を支援する取り組みに力を入れる予定だ。

オバマ夫妻にとってホワイトハウスでの8年間は、変革への取り組みの始まりにすぎない。